

スライド 1 / 449 文字



みな
皆さん、こんにちは。

さむかわまちしゃかいきょういくいいん やまぐち
寒川町社会教育委員の山口です。

こばやし
小林です。

これから、事例発表を行います。

まず、寒川町について簡単にご紹介させていただきます。

ふる さがみのくにいちのみや さむかわじんじゃ もんぜんまち し ちやうない
古くから相模国一之宮、寒川神社の門前町として知られていますが、町内
には旧石器時代の遺跡など、太古の昔から人々が生活していた痕跡が残って
います。

しょうわ ねん ちやうせい しこう さむかわまち しょうわ ねんだいなか こうどけいざい
昭和15年に町制を施行して寒川町となり、昭和30年代半ばから高度経済
せいちやうき こうじやう あいつ しんしゆつ じんこう きやうぞう はじ ご ぞうか
成長期に工場が相次いで進出し、人口が急増し始めます。その後も増加
けいこう れいわ ねん げんざい かながわけんない じんこう もっと
傾向をたどり、令和5年4月1日現在で48,545人と神奈川県内で人口の最
もおお まち
も多い町となっています。

ちやういき どうざい なんぼく めんせき へいほう
町域は東西2.9キロ、南北に5.5キロ、面積は13.42平方キロメートルで、
おおむねへいたん まち
おおむね平坦なコンパクトな町です。

まち なんぼくほうこう はし さがみせん たいしやう ねん ちがさき さむかわかん かいつう
町の南北方向に走るJR相模線は、大正10年にまず茅ヶ崎・寒川間で開通し、
げんざい ちやうない えき ちやうみん あし りやう
現在は町内に3つの駅があり、町民の足として利用されています。

しゆとけんちやうおうれんらくじどうしゃどう じゅうかんどらう かいつう へいせい ねん
また、首都圏中央連絡自動車道(さがみ縦貫道路)が開通し、平成25年に
ちやうない しやもう こうつう りべんせい
町内にインターチェンジが2か所設けられたことにより、交通の利便性が
おおはば こうじやう
大幅に向上しました。



さむかわちょうない おも がっこうしせつ しょうがっこう こう ちゅうがっこう こう けんりつこうこう こう、
寒川町内の主な学校施設は、小学校5校、中学校3校、県立高校1校、
しゃかいきょういくしせつ こうみんかん かん しせつ としょかん かん
社会教育施設は公民館が3館4施設、図書館が1館あります。

こうみんかん ほんじつ かいじょう ちょうみん しょうわ ねん かいかん
公民館は、本日の会場である町民センターが昭和54年に開館し、ホール
てんじしつ そな おおがたこうみんかん ほか さむかわしょうがっこう よゆうきょうしつ かつよう
や展示室を備えた大型公民館です。この他に寒川小学校の余裕教室を活用
した町民センター分室があります。

ほくぶちく なんぶちく ろうじんふくし こうみんかん ふくごうしせつ ぶんか
北部地区と南部地区には老人福祉センターと公民館の複合施設となる文化
ふくしかいけん しゅうかいしつ じっしゅうしつ としょかんぶんしつ そな しせつ
福社会館があり、それぞれ集会室や実習室、図書館分室を備えた施設となっ
ています。

さむかわそうごうとしょかん ぶんしよかん ふくごうしせつ へいせい ねん かいかん そうしよ
寒川総合図書館は文書館との複合施設で、平成18年に開館しました。蔵書
さいだい まんさつしゅうよう ちょうないがい おお りようしゃ
が最大23万冊収容でき、町内外から多くの利用者がいます。

さむかわまち こうみんかん としょかん へいせい ねんど していかんりしゃせいど どうにゅう
寒川町の公民館と図書館は平成29年度から指定管理者制度を導入し、
みんかんじぎょうしゃ かんりうんえい おこな
民間事業者による管理運営を行っています。

がいぶひょうか ちいき と い しゃかいきょういくしせつ あ かつ けんとう
外部評価や地域のニーズを取り入れた社会教育施設の在り方を検討して
いくため、しゃかいきょういくいんかいぎ なか こうみんかんぶかい としょかんぶかい せっち
社会教育委員会議の中に公民館部会、図書館部会を設置していま
す。

ほんじつ けんきゅうはっぴょう かくぶかい じれいはっぴょう
本日の研究発表では各部会からそれぞれ事例発表をさせていただきます。



本日の全体テーマは「社会教育でめざす『ひとづくり・つながりづくり・まちづくり』」としました。

近年は少子高齢化、情報化、グローバル化の進展、地域コミュニティの衰退、新型コロナウイルス感染症拡大など、私たちの生活には急速な社会環境の変化に対応しなければならない課題が増えています。

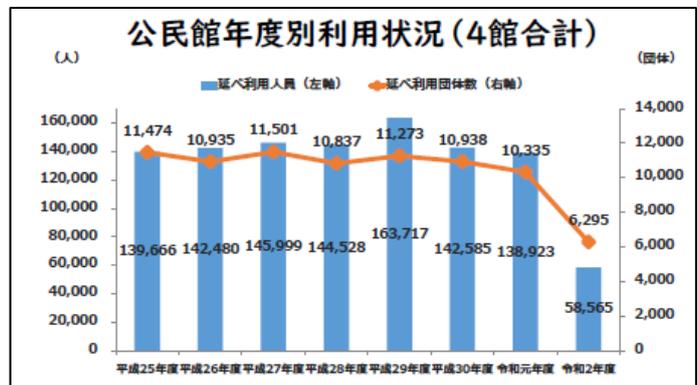
豊かな人生を送るためには、生涯にわたる学びを通じて行動変容をすることが必要とされており、ここに社会教育の力が期待されています。

地域の社会教育活動には、仲間と学び、支え合うことで、交流が深まり、コミュニティの維持・活性化に貢献していくことが大きな役割となります。

地域に居場所があること、仲間がいることで自己肯定感が得られ、地域に対する愛着、よりよいまちづくりに持続的に取り組もうという意欲にもつながります。

このようなことから、町民の学びの拠点となる公民館や図書館での人や地域をつなぐ取り組みについて本日は事例発表を行います。

初めに公民館部会の「すべての世代が集う公民館をめざして」から発表いたします。



町内 4 つの公民館は自主的なサークル活動で多くの利用がある身近な学習場所です。

また、講座やイベントは地域コミュニティを育む交流の場としても重要な役割を担っています。

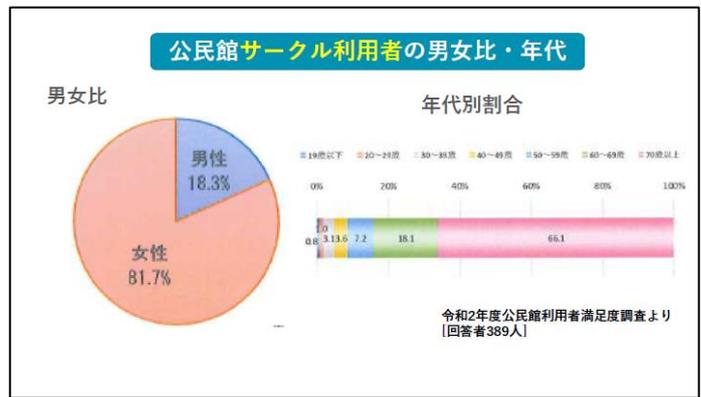
このグラフは公民館の年度別利用状況です。

令和元年度までは利用団体数、利用者数は横ばいであり、固定化している状況がありました。

そして、令和2年から拡大した新型コロナウイルス感染症は、公民館活動にも大きな影響を与えました。3月から6月まで公民館が臨時休館となり、外出自粛要請など、人が対面で集まる機会が減ったことで、利用が大幅に落ち込みました。

また、学校のPTAや、自治会・町内会、地域の伝統行事なども活動自粛となったことで、つながりがさらに希薄になりました。

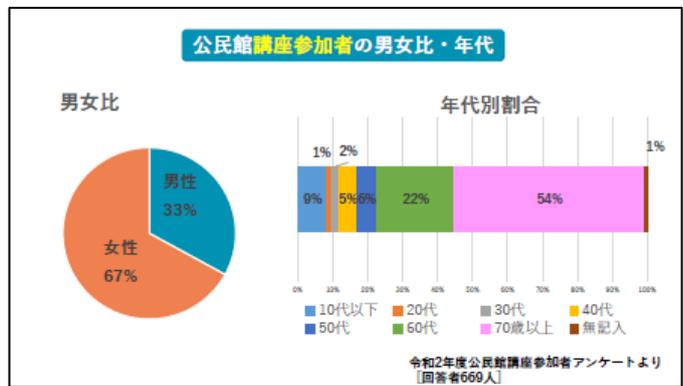
このような地域コミュニティの衰退や社会的孤立が課題となる中、公民館が身近な学習拠点としての役割を果たし、人々がつながるためには、どのような取り組みが必要とされているのか検討しました。



まず、コロナ前に公民館をどのような人々が利用しているのかをアンケート結果から分析しました。

公民館では、主にサークルを対象に毎年「公民館利用者満足度調査」を実施しています。

このグラフは令和2年度実績です。定期利用者の81.7%が女性、年代別では70歳以上が66.1%と割合が非常に大きくなっています。



こちらは令和2年度の公民館講座に参加した方へのアンケート調査結果です。こちら参加者の67%は女性、年代は70歳以上が54%と過半数を占めています。

この2つのアンケート結果からも、公民館にはシニア世代の女性の利用は多くありますが、男性と20代から50代までの働き盛り世代・子育て世代が少ない結果が出ています。

人生100年時代が到来し、誰もが「生涯学習社会」の実現をめざす必要があるとされておりますが、公民館利用の実状としては、利用者の性別、年代に偏りがあることが明らかになりました。



そこで、公民館こうみんかんにすべての世代せだいが集うつどために、関心かんしんを高たかめてもらう取とり組くみ
を考かんがえました。

公民館をあまり利用していない世代とその原因

①中学生・高校生・大学生

生活圏や活動範囲が広がり、地域での活動が少なくなる。

②勤労世代

平日は仕事に時間がとられ、あまり地域に目が向かない。

③定年退職世代（とくに男性）

今まで地域と接点のなかった人は、活動に入るきっかけが難しい。

公民館の存在を知らない。

公民館を知るための情報発信が足りない

まず公民館を利用しない世代とその原因について考えました。

学生は、年齢が上がるほど、生活圏や活動範囲が広がり、地域での活動が少なくなること。

勤労世代は、平日は仕事に時間がとられて、休日や勤務後の余暇時間があっても地域での活動にはあまり目が向かないこと。

定年退職をした世代でとくに男性は、自治会などの地域活動や子育てなど家族に任せきりであった人ほど、地域との接点がなく、活動に入るきっかけが難しいこと。

このような世代の人には地域で活動する入口として、公民館をもっと活用してほしいところですが、利用者が増えないところには、まず公民館の存在を知られていない、知るための情報発信が足りないのではないかという意見が出ました。

公民館を利用していない人へのアプローチ方法	
①公民館を知ってもらう	→公民館活動、サークルへの認知を高める
②公民館に来てもらう	→公民館に入りやすい雰囲気をつくる
③公民館活動に参加してもらう	→魅力的な公民館講座を企画する
④公民館活動を継続してもらう	→公民館サークル活動の参加を促す

そこで、公民館を利用していない人へのアプローチ方法を検討しました。

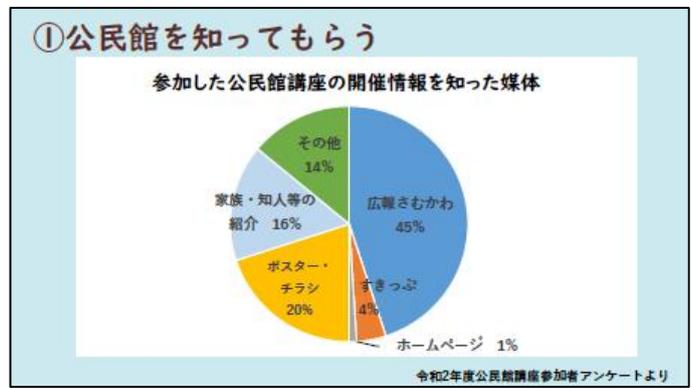
1点目はまず、公民館を知ってもらうこと。あらゆる世代に向けて公民館活動、サークルへの認知を高めること。

2点目は、公民館に来てもらうこと。小学生などは学区に公民館がなければ、自主的に足を運ぶ機会が少ないです。また、場所を知っていても、中に入るきっかけがつかめない人もいるので、入りやすい雰囲気をつくること。

3点目は、公民館活動に参加してもらうこと。活動するきっかけとなるように魅力的な講座を企画すること。

4点目は、公民館活動を継続してもらうこと。サークル活動に参加し、定期的に公民館を利用してもらうこと。

この4点について考えました。



まず、1点目の「公民館を知ってもらうこと」について、現在、公民館に来ている人はどのようなところで情報を得ているのか、講座の参加者アンケートで分析しました。

令和2年度の参加者アンケートの結果では、町の広報誌「広報さむかわ」が45%となっています。「すきっぷ」は、町内の保育園、幼稚園、小学校を通じて年4回配布している子ども対象事業を掲載している情報紙で、これが4%となっており、広報紙とすきっぷという紙の情報誌によって開催情報を知った方が全体の約半数となっています。

この調査では、ポスター・チラシが20%となっており、町内の広報掲示板や公民館内に掲示するポスターから情報を得ている人も一定数おり、効果があることがわかりました。

反対に、最近ではスマートフォンやタブレットを持つ方が多くなりましたが、公民館講座の情報をホームページから知る方は1%と非常に低いこともわかりました。

しかし、認知度としては低くても、やはりインターネットを活用してタイムリーな情報を発信することも重要だと考えます。



公民館を知らない人、関心のない人に情報がいきわたる工夫、PR方法はどのようなものが考えられるか公民館部会で検討した中で、年1回保存版の公民館利用ガイドを配布してはどうかという意見ができました。

利用ガイドを作るにあたり、

- 公民館活動をすべて紹介しようとせず、「公民館に来てください」とアピールするものを強調する
- 表紙は「公民館へ行こう」というような呼びかけるキャッチコピーや写真などを用いて、目を引くデザインが良い。
- 子ども向けや女性向けの講座は充実している。これまで公民館を利用してこなかった人に向けた講座づくりや、きっかけづくりが必要であるが、「利用していない人」では対象が漠然としてしまうため、仕事を退職して、時間に余裕ができた人をターゲットにする。

といった意見が出ました。

令和3年4月に第1号を発行し、毎年4月に広報誌とともに全戸配布をしております。

2点目の「公民館に来てもらう」
ためには、まず公民館の存在を知
ってもらわなければなりません。



幼稚園・保育園、小中学校のPTAや保護者会の集まりで、打ち合わせや
懇親会ができる場所を探しているが、公民館を利用できることが知られてな
いという意見もありました。

ニーズがあっても存在が知られていないという課題について、まず公民館
へ来てもらうために、行きやすく、入りやすい雰囲気づくり、分かりやすい
利用案内が必要とされています。

また、現在の公民館は駐車場が少ない、コミュニティバスが近くを走って
いないなど、アクセスのしにくさについても意見が出ました。

これに関し、町内のすべての公民館は、建設後40年以上が経過し、老朽化
が進み、寒川町公共施設再編計画では公民館の移転が検討事項となっていま
す。

この計画では、公民館の各部屋の稼働率から現行の機能とニーズに不一致
が生じていることが指摘されています。調理室や和室は稼働率が低い
ため不要との見方もありますが、社会教育施設である公民館については、単
に稼働率だけを見るのではなく、「住民ニーズ」と「社会の要請」の2つに
応えていくことが必要です。

「公民館に来てもらう」ためには、入りやすい雰囲気づくりのほか、アクセ
スのしやすさや、持つべき機能、それを最大限に発揮するための環境づくり
をしていくことが必要です。



3点目の「公民館活動に参加してもらう」では、講座は、町民のニーズに合った事業を開催することができれば、多くの参加者が来ることが望めます。一度参加した経験ができれば、その後も講座や、サークルで活動するきっかけにつながります。

男性の利用を増やすためには、来やすいように男性対象に特化した内容や募集方法を工夫する必要があります。例えば、そば打ち教室や、歴史講座は男性に人気があります。

また、親子で参加できる事業には、子育て世代の保護者の参加が見込めます。星空観察会や親子工作教室は、父親の参加も多く見受けられました。

初めて参加した男性や子育て世代が継続して公民館に足を運んでもらえるような魅力的な講座づくりが重要です。



公民館講座に参加するためには申込手続きが必要です。これまでは公民館の窓口か電話で申し込み受付をしていましたが、開館日の午前9時から午後5時までに手続きをしなければならず、共働き家庭の多い子育て世代には申し込みがしにくい状況がありました。

そこで、令和4年度から新たにインターネットで手続きができる申込フォームを始めました。

スマートフォンやパソコンで24時間いつでも申し込みできることから、大変好評で、手続きがしやすくなったことにより、初めて参加したといった新たな利用者の獲得につながっています。

また、夏休みの子ども対象事業など、参加申し込みが多いことが見込まれる講座は抽選方式で受付をしています。

講座によっては定員の3倍を超える申込もあり、落選者が多いことは心苦しいですが、先着順よりチャンスが増えることや、潜在的ニーズが高い企画内容であったことが申込者数という数値で効果が見えるようになりました。



また、^{さむかわまち}寒川町では^{まちこうしき}町公式LINEを^{かいせつ}開設し、^{やくまんせん}約1万5千人の^{とうろくしゃ}登録者がいることから、^{れいわねん}令和4年度から^{こうみんかんこうざ}公民館講座の^{じょうほう}情報の^{ラインはいしん}LINE配信を始めました。

^{まちこうほうし}町の^{もうしこみかいしび}広報誌より^{かいさいびちか}申込開始日や^{じょうほうはっしん}開催日近くに^{じょうほうはっしん}情報発信できる^{せっきょくてき}メリットがあり、^{じょうほうはっしん}積極的に^{はいしんちよくご}情報発信するようになったところ、^{もうしこみしゃ}配信直後に^ふ申込者が増える^{こうか}効果が出てきました。

とくに^{さき}先ほど^{しょうかい}紹介した^{もうしこみ}ウェブ申込フォームを利用して^{りょう}いる講座は、^{こうざ}LINEの^{がめん}画面から^{もうしこみてつづ}申込手続きが^{かんたん}簡単に行うことができるため、^{りべんせい}利便性の^{こうじょう}向上が^{はか}図られました。

LINEで^{じょうほうはっしん}情報発信を始めた頃は、^{はじ}町民に「^{まち}町からの^しお知らせが^{ひんぱん}頻繁で^{らわしい}わかりやすい」との^{いけん}意見もありましたが、^{さいきん}最近では「^{まち}町の^{じょうほう}いろいろな^し情報を知ることが^よできて^{こういてき}良い」と^{いけん}好意的な^{たいはん}意見が^{たいはん}大半となりました。

^{れいわねん}令和5年度から^{こうみんかんこうざ}公民館講座^{さんかしゃ}参加者^{アンケート}アンケートに^{まちこうしき}町公式LINE^{とうろくじょうきょう}登録状況を^{かくにん}確認していますが、^{さんかしゃ}参加者の^{とうろく}46%が^{じょうほうはっしん}登録しており、^{ゆうこう}情報発信に^{ばいたい}有効な^{ばいたい}媒体となっています。



4点目の「公民館活動を継続してもらう」ためには、人と人がつながることが重要で、サークルの育成、支援を充実させる必要性があります。

令和2年度の新型コロナウイルスの影響で公民館の利用者数が減少しましたが、これは各サークルの会員数が以前より減少していることが大きな要因となっています。

公民館がサークルと個人をつなぐ役割となるように、「サークル入会体験フェスタ」を毎年5月と11月に開催しています。この1か月間にサークルの見学会や参加体験日を設定し、新規会員の加入促進を支援しています。

しかし、フェスタ参加者やサークル加入者はそれほど多くない状況です。そこで、私たちはサークルの会員が減少している根本的原因について考え直しました。

公民館サークルの会員減少について

- ① 公民館活動・サークルへの認知が低い
- ② 「サークルに入ると面倒」という気持ちがある
- ③ サークルには新しい人を入れたいという気持ちがある

公民館サークルの会員が減少している原因として、公民館部会で意見を出し合ったところ、3つの問題が見えてきました。

この問題の改善方法について考えました。



まず、課題の1点目、「公民館活動・サークルの認知が低い」ことについては、「見える化」が足りないことがあります。

公民館の活動を知ってもらうためには、町民の全世代の目にとまるよう、紙媒体とインターネット媒体の両輪で情報提供を進める必要があります。さらに情報が来るのを待っているのではなく、情報を得ようと能動的になってもらうことが望まれます。

各公民館にはどのようなサークルがあるのかがあまり知られていないため、公民館の入り口付近にサークル一覧を掲示したり、サークル一覧を配布したりしていますが、これを公民館以外の場所でもPRすることが有効ではないかとの意見がでました。

サークル入会体験フェスタについては、参加を促す工夫が必要であり、活動内容や参加できるスケジュールを確認しやすいように、ポスターにはサークルの体験実施日が一目でわかるレイアウトにして、町内の広報掲示板には貼るようにしました。

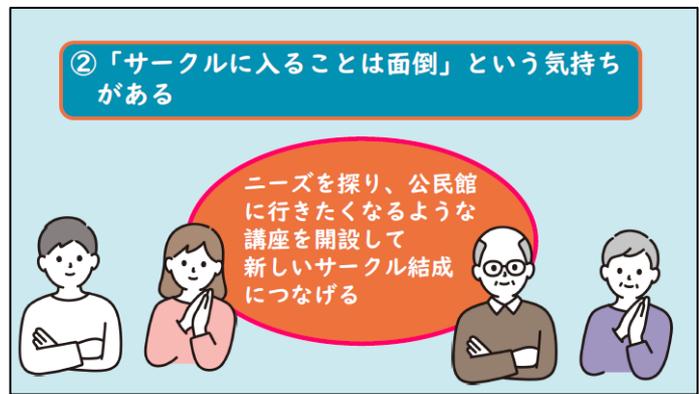
さらにフェスタの期間前から公民館ロビーでサークルの作品展示を行えば、それを見た人が期間中に足を運び、サークル見学を促す契機になるのではないかという提案もあり、実行しています。



課題の2点目は「サークルに入ることは面倒という気持ちがある」ことです。
地域に仲間がいて、活動が楽しいという気持ちを高める工夫をしてはどうか
という案が出されました。

公民館利用者拡大のためには、ニーズの高い趣味的な内容のほか、運動や
健康関係など公民館に行きたくなるような講座を開設し、その参加者を仲間
との居場所づくりや新しいサークル結成に繋げていく団体育成の支援も
重要です。

とくにリタイア世代の男性は、働いていた時期に地域とのつながりが希薄
だった場合が多く、地域活動に参加するきっかけづくりが難しいこともあります。



まず^{こうみんかんこうざ}公民館講座^{さんか}に参加して、参加者^{さんかしゃどうし}同士が仲良^{なかよ}くなり、居場所^{いばしょ}づくりとなることで、もうちょっと^{つづ}続けてみたいという意欲^{いよく}がわきます。

さらに、「健康^{けんこう}にいい」、「生きがい^いを感じる^{かん}」というような魅力^{みりょく}が感じられる^{かん}内容^{ないよう}であると、サークル化^かに繋がり^{つな}やすい傾向^{けいこう}があります。

この時^{とき}に、サークルにしようと音頭^{おんど}を取^とってくれる人^{ひと}の存在^{そんざい}は非常^{ひじょう}に大き^{おお}いです。

③サークルには新しい人を入れたくないという気持ちがある

課題の3点目は「既存サークルには新しい人を入れたくないという気持ちがある」こと。

改善案として、新しく参加する人が委縮したり、疎外感を感じなくしたりする配慮をするという意見がありました。

運動系サークルは活動場所の広さと人数の兼ね合いがあり、人数が増える
と活動が難しくなる事情があります。

また、技量が違う人が入ってくると、サークル内にギャップが生まれてしまうため、新たな受け入れはできない場合もあります。

コロナ禍の中では活動休止や、新規会員の受け入れをしないサークルもあり、既存サークルへの加入促進だけでは活性化の実現は難しい状況が見えてきました。

ほかにも運営方法や活動の方向性など、サークルごとに様々な悩みはつきものですが、自分たちの中だけでは解決策が浮かばないこともあります。



サークルの中の課題解決支援として、サークル同士で抱えている課題を
情報交換したり、他のサークルと交流したりする機会があると、解決の糸口
や、新しいつながりを広げることができます。

各館の登録サークルの交流会を行うことは有効なのではないかという
意見が出ました。

公民館まつりは、様々なサークルが一堂に会し、展示発表を行ったり、ま
つりの運営に協力したりすることで、ジャンルの違うサークルの人と出会
う良い機会となっています。

地域に知り合いが増えることは楽しいと感じ、サークルに新しい仲間を受
け入れて、教えあおうという優しい気持ちにつながることを期待します。



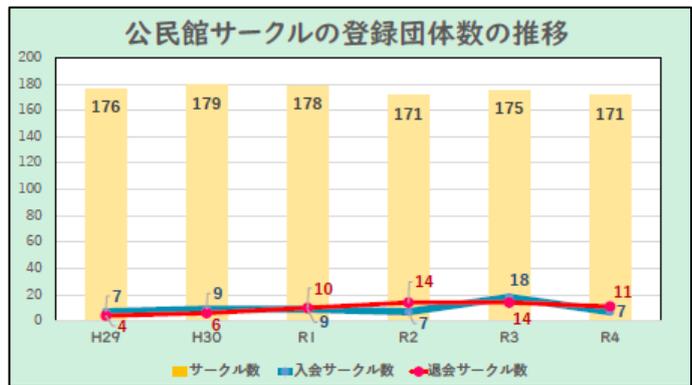
これらの^{とりくみ}取組^{おこな}を行った^{せい}成果^かについて、^{れい}令和^わ4^{ねん}年度^どの利用^り実績^{よう}から^じ検証^っして^{せき}みました。^{けん}証^しう



まず公民館の年度別利用状況ですが、令和3年度以降は回復傾向が見られます。

4年度の利用団体数は元年度より増加となりました。

利用者数については2年度より伸びてはいますが、まだ戻りきっていないことから、これは各サークルの会員数の減少が続いていることが原因と考えられます。



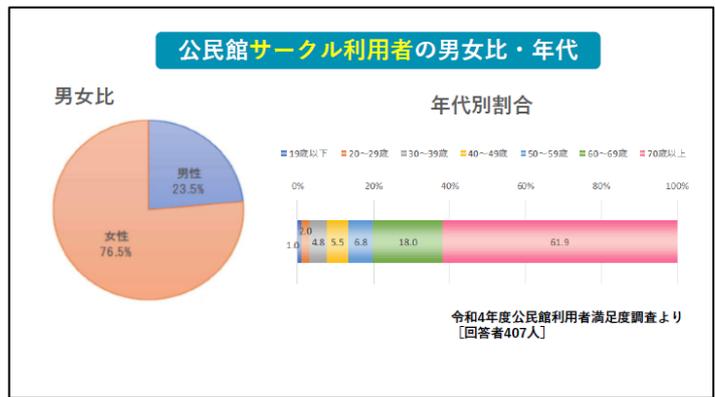
公民館で定期的に活動するサークルは公民館の「利用者の会」に登録してもらいます。

登録総数だけを見ると単に毎年サークル数が維持されているように見えていましたが、実は入会と退会がほぼ同じような数となっていることがわかりました。

新型コロナウイルス感染症の影響で、高齢化して会員数の少なかったサークルは退会が増えましたが、それに対して、新しいサークルを結成する機運も高まったようで、令和3年度は表にある6年間のうちで最も多い18団体が新たに入会しました。

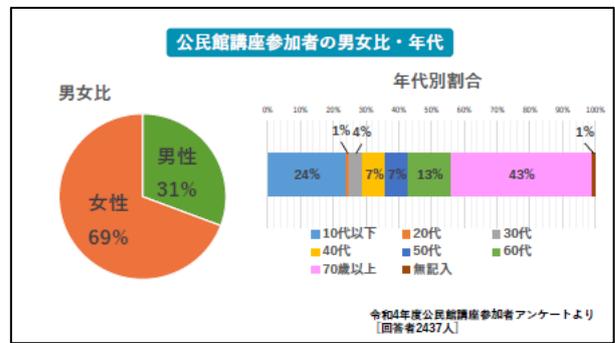
その中には公民館の連続講座からサークル化につながったものが6団体あり、令和4年度も新たに入会した7団体のうち、6団体が講座からのサークル化でした。

魅力的な公民館講座の企画がきっかけとなり、人をつなげ、継続的な学びにつながる成果となりました。



公民館利用者の年代と男女比については、令和4年度の公民館サークル利用者アンケート結果では、男性が23.5%、70歳代の割合が61.9%となりました。

サークルの利用については、男性と60歳代以下の利用者が若干ではありますが、増加している結果となりました。



公民館講座参加者の男女比・年代については、令和4年度のアンケート結果では、2年度と比較し、男性は2%減少していますが、60歳代以下の参加割合は11%増加しました。

講座参加者は、サークル利用者よりも若い年代多いことから、講座のサークル化を積極的に促すことで、公民館利用者の若返りが期待できるきざしがみえてきました。

また、男性の利用促進に向けて、さらなる取組が必要な結果となりました。男性の地域コミュニティへの参加を促進させるためには、60歳以下の年代には余暇時間の有効活用の提案のほか、リタイア後の男性の生きがいつくりにつながる、講座内容の工夫などがもっと必要であることが考えられます。

まとめになりますが、公民館の現状を把握し、課題を探り、その改善策について検討してまいりました。

公民館が地域の学びの拠点として、現在、利用が少ない男性や若い世代の地域活動への参加や、仲間づくりのきっかけをつくっていくことが重要となっています。

寒川町の社会教育では、「町民が地域で学び、その成果がひとつづくり、まちづくりに生かされている」ことをめざす姿としております。

これからも子育て世代も含めすべての世代が地域で活発に活動できるよう、「すべての世代が集う公民館」を目指してまいります。



事例発表①「すべての世代が集う公民館をめざして」は以上になります。

ご清聴ありがとうございました。

8262 文字（約 28 分）